

2024年1月17日作成

Ver.1.1

下顎骨形成術である SSRO の変法である short lingual osteotomy と short buccal osteotomy の術後安定性の評価

1、研究の目的と意義

【目的】本研究の目的は、顎変形症の下顎骨に対して下顎骨形成術を行なわれた患者さんを対象にし、実際の骨切り線の方角によって、下顎枝矢状分割術（SSRO）、SSRO 変法であり顎関節のついた近位骨片に下顎枝後縁がついた状態である SLO、SLO とは反対に下顎枝後縁が歯が並んでいる遠位骨片についていた状態である SBO の3群に分類し、術後の骨格性の安定性を評価します。それぞれの群の術後安定性に差があるか否かを明らかにすることが目的です。

【意義】群間に差がないようであれば、従来通りの術後管理を行いますが、差があれば術後の管理を再考する必要があるため、今後の術後管理法を再構築する必要があります。

2、対象となる患者さん

2008年8月1日から2023年3月31日までの間に長崎大学病院口腔外科で顎変形症の診断で下顎骨形成術を受け、術直前（T1）のCTおよび術前（TO）、T1、術後6か月以上経過時（T2）の頭部X線規格写真のある患者さんを対象としております。

3、研究の方法

顎変形症の診断で下顎骨形成術を施行された患者さんの術後CT（T1）で、下顎骨骨切りの様相を、SSRO、SLO、SBO 群の3群に分けます。術前（TO）、術直後（T1）、術後6か月以上経過時（T2）の頭部X線規格写真を用いて、下顎骨の安定性を評価します。

4、研究に用いる情報

	術前 (TO)	術後5日以内 (T1)	術後6か月以降 (T2)
患者背景	○	-	-
自覚所見	○	○	○
画像検査(頭部X線規格写真)	○	○	○
画像検査(CT)	○	○	○
開口量	○	○	○

本研究に特化する検査はありません。

以下の項目を、電子カルテおよび画像から情報収集します。

- 患者背景：性別、年齢、顎変形症の診断名。下顎の移動量。
- 自覚所見：顎関節症状の有無・種類、おとがい神経支配領域の知覚異常の有無・種類。
- 画像検査（頭部X線規格写真）：安定性を評価。

- 画像検査（CT）：分類。
- 開口量：中切歯切縁間距離(mm)。

5、研究期間

研究機関長の許可日～2024年12月31日

6、外部への情報の提供

該当ありません。

7、研究実施体制

この研究は長崎大学病院のみで実施する研究です。

《研究責任者》

長崎大学病院 口腔外科 鳴瀬智史

8.お問い合わせ先

長崎大学病院 口腔外科 鳴瀬智史

〒852-8501 長崎市坂本1丁目7番1号

電話：095(819)7704 FAX 095(819)7705

【ご意見、苦情に関する相談窓口】（臨床研究・診療内容に関するものは除く）

苦情相談窓口：医療相談室 095(819)7200

受付時間：月～金 8：30～17：00（祝・祭日を除く）